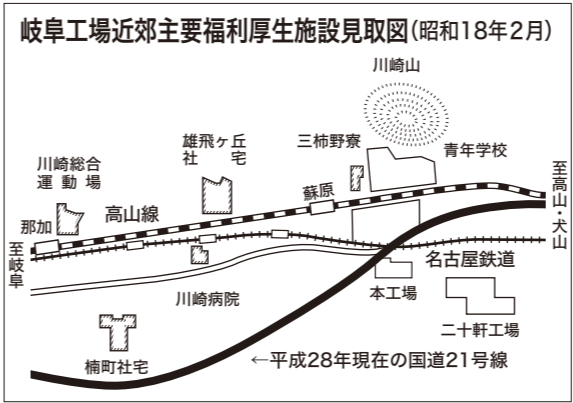


各務原飛行場と 川崎航空機(2)

「生産増強に一億総動員で！」
…しかし敗戦

日中戦争が長期化する中、昭和13年(1938)4月、陸軍から生産増強要請が出された川崎航空機は、各務原と明石の2工場体制とし、生産能力を小型機換算で月産280機と増大させました。その後、各務原分工場は「岐阜工場」と改称しました。

岐阜工場では、昭和14年6月現在の従業員数6500人を昭和16年9月までに7500人に増員することとしました。ところが中堅工員の応召が相次ぎ、試作能力も生産能力も当初目標の60%程度にとどまりました。苦勞して育てた熟練工を「赤紙」一枚で兵士に召し上げられ、その補充も容易ではありませんでした。そんな中、太平洋戦争が始まりました。昭和16年12月8日のことでした。



『各務原市民の戦時記録』より作成

5. 太平洋戦争へ(昭和16年〜20年)
川崎航空機は、相次ぐ陸軍からの要請に応えるため「第5期拡充計画」を立案しました。岐阜工場の計画では、「部品工場、整備工場の増・新築」「高本線の北側に5000人が収容できる工員用大食堂の新設」「徴用工のための宿舎、徴用工育成施設の建設」「設計事務所の増設」等を含んでいました。そして、最終目標として昭和19年3月には、「小型機換算で月産360機」を目指すというものでした。

昭和18年2月時点の工員数は岐阜工場2万6450人、明石工場1万2367人と記録されています。その実態は、太平洋戦争開戦以降に入社した徴用工と女子工員が大半で、生産能力の低下は如何とも為し難い状態でした。しかし、月産550機の要求は何が何でも達成しなければなりません。最後の手段としてとられたのは、「女子挺身隊の投入」と「勤労報国隊の受け入れ」でした。この結果、岐阜工場の

しかし、建設資材の調達が困難になり、兵力増強が優先されたため人的資源についても困難を極めました。その結果、以下のような方策がとられたのです。
ア、遊休工場などの転用・設営
昭和17年末、愛知県一宮市にある東洋紡績一宮工場を借り受け、2000人の従業員で操業を開始。(この一宮工場は昭和20年7月に空襲を受けて焼失)
岐阜市域で本荘分工場(部品製作)、長良分工場、三里分工場、富士分工場、朝日分工場の外、忠節錬成場、木曾川錬成場、真清寮の設営。
イ、徴用工と学徒動員
昭和18〜19年度の2年間で「9400機を生産せよ」という陸軍の指示で、初年度は2500機を完成させました。しかし次年度には前年度からの持ち越し分を含め、月産550機が「納入義務」となりました。



川崎航空機で働く富田高女

工員数は増え続け、昭和19年12月には徴用工・学徒動員・女子挺身隊を含め、従業員は4万人と膨らみました。こうして「一億一心火の玉だ」とおられる。粗製乱造の時代に入っていました。太平洋戦争当時、この各務原で生産された飛行機は、陸軍の全飛行機の70%にあたりました。その中でも、川崎航空機が開発製造した「陸軍三式戦闘機・飛燕」は、岐阜工場2884機も作られました。

この戦闘機は日本の軍用機の中でも唯一、水冷式発動機を装備した高速戦闘機で、本土防衛の重要な飛行機でした。しかし昭和19年頃から、装備部品の入手困難や工員の質的低下で、さまざまな歪みが出てきました。発動機の生産も大幅に遅延し、工場で生産された機体が納入できず、「首なし飛行機」として各務原飛行場に並ぶほどでした。

6. 米軍の空襲と工場疎開

昭和19年6月、米軍は、「ボーイングB29型高々度長距離爆撃機」による日本本土の空襲を開始しました。

爆撃の被害を最小限にとどめるため、工場疎開が開始されました。爆撃目標の一つであった川崎航空機岐阜工場も、林間工場(蘇原村須衛、武儀郡美濃)、地下工場(土岐郡瑞浪)、学園作業場(岐阜市本荘の岐阜高等女学校)等の疎開先で部品生産等を開始しました。その他、大日本紡績岐阜工場(岐阜市田神)、近江絹糸中津川工場等を機体組立工場に転用する計画が実施されました。

また、主力工場の各務原工場(三柿野)では、突貫工事ですぐ近くの山々(川崎山や赤星山等)の裾をくり抜いて「掩体壕(えんたいごう)」「(半)地下式格納庫」を造って、防空壕兼完成機体の退避壕にしました。

(川崎航空機に勤めていた人の話)

戦局が悪化の一途をたどっていた昭和19年末頃のことです。私が勤めていた川崎航空機工場では、工場の計画的分散疎開が始まりました。私は地下工場の設計を命じられました。土木、地質、建築の知識のない私は、どのように設計していいのか戸惑いました。16歳の時です。(中略)終戦後、近くの赤星山、各務山に行ったことがあります。赤星山はこの辺りの山の中で

は標高が一番高い所で、やはり航空廠の地下工場が造られていました。…この山の南側には防空壕が掘ってあり、爆弾の直撃で多くの人が亡くなっています。(略)各務山の山肌を削り取った跡に各務原市立中央小学校が建てられています。この学校の北辺りの山裾には当時、航空廠の地下飛行機格納庫が建設されていました。

このように近辺の山には地下工場や地下格納庫が建設されました。一方、米軍の日本本土への空襲は激しくなり、昭和20年3月10日には東京が爆撃されました。そして、昭和20年6月22日と26日には各務原とその周辺も大空襲を受け、川崎航空機岐阜工場も壊滅してしまいました。

ほとんどの従業員は工場の北側にある川崎山と赤星山(現在の市民会館隣接地)の防空壕や木曾川の川原にある林間に退避して難を逃れることができました。しかし、工場警備員と工場幹部など63名が犠牲となりました。周辺住民も58人が帰らぬ人となりました。

(周辺住民Aさんの話)

昭和20年6月22日午前10時頃、本屋敷の草引きに出かけ、ちょうど川崎整備工場の東門に来た時、ラジオから「米軍機B29の編隊が伊吹山を東進中。」という声が聞こえたかと思うと、川崎や航空廠のサイレンがけたたましく響きました。工場の人々が東に南に走り



直撃弾を受けた岐阜工場

出した頃、早くも爆音が聞こえました。私は叔母の孫と一緒に急いで竹やぶの防空壕へ転がるように避難しました。早くも生温かい爆風が壕に入り、上空からは1トン爆弾の落ちてくる「ザー」という不気味な音。続いて大地を揺るがす地響き。生きた心地はしませんでした。(中略)

何十機ものB29の爆音はとても長く感じられました。(略)おそろおそろの北方を見ると、養成隊の建物がすべてなくなり、火柱だけが上がっていました。2階建ての建物が5棟も並んでいたのが倒れ、火を吹いていました。担架で運ばれた死者、負傷者、道路脇の溝に伏せたまま死んでいる人、直撃を受けた竹やぶには大穴があき、残った竹に肉片やボロボロの衣服の切れ端が引っ掛かっている様子は、地獄とい

うか、これが戦争かと思いました。

(周辺住民Bさんの話)

この辺りを見た人の話によると、60人以上の人がこの付近で亡くなられたそうです。私は怖くて体の震えが止まりませんでした。

家族が避難している各務山に急ぎました。山の麓には、兵隊さんや軍需工場の工員さんなど多くの人が避難されていました。多くの人々の中から無事でいる家族を捜し出すことができました。

夫を戦地に出し、家族と家を守ってきた私は、爆撃で家をなくしたものの無事な家族の姿を見て、本当にホッとしました。私は安心したためか力が抜けるのを感じました。

同年7月9日に岐阜市街が空襲を受け、旧市街地の80%が焼失し、ほぼ800人が亡くなりました。また7月29日の空襲で一宮分工場が焼失し、生産停止のまま、終戦の日(昭和20年8月15日)を迎えました。

同年10月、進駐軍(連合軍)が旧各務原飛行場に進駐して以来、那加町は基地の町となりました。

○この文章は、『九十年の歩み』『かみ野の風土―産業と人物』『各務原市史・通史』『各務原市民の戦時体験』等をもとに、後藤征夫がまとめた。